

クリスマスの当事者になる

丸山 勉

[聖書] ルカによる福音書 1章 26節～38節

六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった。天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。神にできないことは何一つない。」マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」そこで、天使は去って行った。

[序] 「当事者」ということば

「当事者」という言葉（もちろん昔から使われている言葉です）が、このところ良く耳にしたり、話の中に出てくるようになったと思います。「当事者」。その背景には、いわゆるマイノリティー（社会的少数者）とされている人々の声が少しずつ注目されてくるようになったということがあるのではないのでしょうか。

今年、一つ大きなニュースとして、国会議事堂の議場がバリアフリー仕様になったということがありました。それは、重度障がい者の参議院議員が二名誕生したことがきっかけです。あるNPO法人の方はこんな記事を書かれていました。

「先日行われた参議院議員選挙にて、“れいわ新選組”から出馬した重度障害のある2名の候補者が当選したことは歴史的快挙で、今後の障害者施策が当事者目線で大きく変わっていくターニングポイントとなるのはおそらく間違いないだろうと確信しています。当選したのはALS（筋萎縮性側索硬化症）の舩後靖彦氏と脳性麻痺の木村英子氏。お二人とも24時間介助なしでは自立した生活ができない重度障害者です。しかし、しっかりとビジョンを持っていて、重度障害があっても人として当たり前生きていける地域社会を目指して、それこそ命がけで闘ってこられました。重度障害者が安心して暮らせる社会はすべての人にとって暮らしやす

い社会になるだろうし、今の社会から“バリア”がなくなって“フリー”となれば誰もが安心して生きられる社会になるはず。そんな社会にしていくためにはまず国会から変えていく必要があります。」と。

まだ参議院の方だけですが、これは大きな一歩になったと思います。テレビでもこのお二人がああ議場で、与党議員に鋭い質問をされていたのが放映されていました。国会議員は国民を代弁している者たちですから、重度障がいの方が国会議員として送り出されることは当然のこととも言えます。また、私はその質問ややりとりを聞いていて、その時空気が変わったことを感じないではいられませんでした。ゆったりとした平和な空気になるのです。これが、「当事者」が参加する、ということなのだと思いました。

[1] 神が人間になるという矛盾

いよいよ今日から 12 月です。主のご降誕を待ち望むアドベントの季節を迎えました。私たちはこのクリスマス、それこそ「当事者」になって、第三者とか、傍観者でなくお迎えしたいと思うのです。

ただ、今日の聖書の箇所は、まだクリスマス前の出来事です。マリアがこのあと間もなくその胎の中にイエス・キリストを宿したとして、その誕生の 10 ヶ月は前の出来事でしょう。

イエス・キリストはいきなり天から成人（大人）の姿でやってきたのではなく、人間の女性の胎の中に、全くの新生児、幼な子の形をお取りになってこの世界にやって来られたのです。よく「聖書は荒唐無稽なことを言っているな、私たち現代人にはとても受け入れ難い」と言われることがあります。それですと当時の人を一段低く見てしまうことになってはいないでしょうか？ そうではなく、実は**当時の人々にとっても、このことが受け入れ難いことであったことは明らかです。「人間となられた神」、「完全な人間であり、完全な神」ということは矛盾したことであり、イエス様をご自分を神と等しい存在として語ったということが当時の聖書の専門家から「神への冒瀆だ」と糾弾されることになり、それが十字架へと繋がったのですから。**

その意味では、「**全くの人間の姿**」をお取りになってこの世界に救い主がおいでになるということは、神様の側で、既に大きな危険を冒すことであったわけです。

[2] なぜ、マリアは裁かれなかったのか？

私は、今日のこの箇所についてのある牧師の説教を聞き、なるほどそうだったことがありました。それはこういうことです。マリアは「**どうして、そのようなことがありえましょ**うか」と天使ガブリエルのお告げに対して疑うようなことを言ったように取れます。とすると、この物語の直前に書かれてある**祭司ザカリア**への、やは

り同じ天使ガブリエルのお告げ——あなたの年齢を重ねた妻エリザベトが男の子を産むというお告げ——をザカリアは疑い、その結果としてしばらくものを言うことが出来なくなるという、まあ、神様からの裁きと言いますか、試練を与えられたのに、マリアの方は裁かれてはいない。これは何が違うのだろうか？ と思ってしまうと、その牧師先生は言うのです。

しかし、その先生は、その疑問に対して「こういうことではないか」という一つの納得を聖書から得たと言うのです。それは先ほどのマリアの言葉です。1:34ですが、「**どうして、そのようなことがありえましょうか**」とあります。この言葉の中の「どうして」という言葉、これはギリシア語の原語ではどちらでも取れるのですが、この「どうして」は、「**何ゆえ**」という疑問符ではなく「**どのような仕方**で」という意味で取っても良い言葉だということに気がついたというのです。実際、殆どの英語の聖書では、「Why」ではなく、「How」という言葉が用いられています。「何故」ではなく、「いかにして」です。

マリアは、御使いの言葉を“疑った”というよりは、**その先を尋ねているのだと**。「いかにしてそんなことが起こりうるのですか？ 私はまだ男の人を知らないのですよ」と。“反発”ではなく、素朴な疑問として天使ガブリエルに問うたのです。そこにあるのは、**自分の境遇を嘆くことでなく、未来に対して自分を開いて行く驚くべき素直さ、従順さ**なのではないか。ですから、天使も「何故？」には答えてはいません。出来事が起こる、その起こり方を語っています。「Why」ではなく、「How」に対して語っています。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。」と。この言葉は極めて重要だと思います。ただあなたに赤ちゃんが生まれるという**人間的な次元**の話をするために私は来たのではないよ、あなたを**神の霊、聖霊が包むのだ、だからあなたが産むことになる子どもは、神の子**なのだよ、と、**神様の偉大なご計画**について、このまだ幼い少女について余すところなく説明をしています。

[3] 神様の言葉から逃げないマリア

私もその牧師先生のお話を聞いて、確かにそういうことなのだと思いました。そして改めて思ったのですが、この箇所、マリアはこの天使と「やりとり」をしていることが分かります。驚天動地、心底驚いたことは間違いないと思いますけれども、こんなことはあり得ないと思って、その天使の言葉を幻想かと思ったり、斥けることも出来たと思いますが、彼女は真正面からその言葉を聴きました。逃げてはいないのです。彼女はまだ幼い女性と言ってよいと思いますが、**神様の言葉を真剣に聴く**という、その様な生き方がいつしかもう出来ていたのではないのでしょうか？御言葉と対峙しようとする、御言葉の前に自分を置くという姿勢です。

聖書はこのマリアと御使いの出会いの初めから、このように書いています。「天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。「戸惑い、考え込む」ことは決して不信仰なことではありません。「信仰」というのは、「葛藤」を生むものだと思います。人格と人格のぶつかり合いだからです。

天使はエリザベトのことにも触れていますよね。「あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。神にできないことは何一つない。」—マリアにとっては、きっとこれまでの人生の中でも、信仰の養いという点において、エリザベトおばさんの存在は大きかったのだと思います。

[結] クリスマスの「当事者」となってゆく

よく言われることですが、マリアにとってこのことを人間的に受け入れることは、自分の人生がひっくり返される、自分への評価も全く失う大変な決断であったと思います。下手をすれば石打の刑、そうでなくても婚約解消、ずっと噂話の餌食になるような話なのです。しかし、神様が私たちと共に歩んで下さるということは、いつもお花畑の中を一緒に行くということではありませんよね。そのようなことを聖書は言いません。そうではなく、あのイザヤ書にありますように、「水の中を通るときも、わたしはあなたと共にいる。大河の中を通っても、あなたは押し流されない」(43:2)と、その只中にわたしは共にいるのだよ、と約束しておられるお方なのです！

マリアは、ただイエスを産んだだけではないのです。マリア自身が、この「共におられる」神の力を自分のものとしたのです。そしてそれこそが、この幼子の別の名＝「インマヌエル」ということではないでしょうか。この「インマヌエル(神共にいます)」なるお方、「キリスト」抜きの「クリスマス」は、世の楽しみはあるのかもしれませんが、一番大切な方の前を通り過ぎてしまうことになれば、それはやはり空しいものでしょう。

私たちもクリスマス当事者になることが求められていると思います。それはどういふことでしょうか？——マリアのようになることだと思います。私たちも、神様を、キリストをお迎えし、聖霊のお助けと導きを頂きながら、色々ある人生ですけれども、その一步一步を、キリストと共に、時に激しく葛藤しながら生きていくことではないでしょうか？ 私のことで恐縮ですが、今年の2月の突然の妹の死がそうでした。「何故」という答えはハッキリとはわかりません。しかし、神様は生きておられて、私に色々なことを語り続けて下さっているのです。自分の罪が前よりも良く分かる

ようになりました。また、私の罪深さに勝る神様の慰めが、本当に確かなことを教えられています。

主イエス様は、「幼な子」として私たちのもとにやってきて下さいました。それは大きく二つの意味があると思わされます。一つは、神様は、**私たちの全人生**を御手の中に握っていて下さるということです。幼な子の命は、その人の命そのものです。自意識がまだ生まれていない時から、そして誰もが病を、また老いを経験し、そして死んでゆく、その**人生のスタートからゴールまで、それをキリストが共に歩いて下さる**ということ。キリストは、私たちの生そのものに連帯して下さるのです。私たちの**人生の悲しみも、過ちも、罪も全部ご存知の上で、私たちを憐れみ、愛し、同伴して下さる**のです。ですから、主イエス様の生まれた場所はみすぼらしい飼葉桶であり、ご生涯の最期はあの十字架でありました。この事実は、**どんな者も、神様の愛の外にはいない**ことを物語っています。

そしてもう一つは、**私たちも神の子、神の「幼な子」と生きるように招かれている**、ということではないでしょうか？ 私はもう子どもは大きくなってしまいましたが、幼い子どもが可愛いな、と思ったのは、親が何か言うと「わかった」「わかった」と、必ず言葉を返してくれることです。どこであのような応答をおぼえるのでしょうか。嬉しそうに「わかった」と言うんですね。あの心が私たち大人も大事なな、と思いました。「神様、わかった」「わかりました」。その心です。マリアは天使ガブリエルに、最後に言いましたよね。

「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」そこで、天使は去って行った。」と結ばれています。

何と素直で、率直で、そして強い応答でしょうか！ これもまた、聖霊が彼女に宿り言わせてくれた言葉なのだと思いますが、神様が私たちに求められている応答は、結局の所、これなのではないでしょうか。神様に、私たちの人生を、**幼子のよ**うに明け渡すことです。これが、「**クリスマスの当事者になる**」ことではないでしょうか？

最後に、週報にもご紹介させていただきました、クラウス・ヘンマーレというドイツのアーレン地区の司教の方の詩をお読みして、お祈りをさせていただきます。

人間になるとは、幼児になること。
アダムとエワ以来、例外はない。
人間の道は、幼児を経由する。
それは神ご自身の道。

神の子は人となりたもうた、幼児となることによって。
幼児になる者だけが、神の国に入ることができる。
単純になること、純粹になること、
ともに苦しむことができること、
ともに喜ぶことができること。
自らを与え、与え尽くすこと。
幼児、それは諦めと打算に抵抗する力。

お祈りを致します。